

25. 牛川小

山内 晴代

○地域素材資料とその活用方法

〈校区の歴史資料〉

①牛川の渡し

「牛川の渡し」は、下川村の村営であった明治から大正のころは、1回の渡船が2銭～5銭でした。昭和7年、豊橋に合併と同時に市に移管され、渡し賃は無料となりました。

現在、一艘の渡し舟が道路の役割で対岸の大村側と往復しています。自転車通学生や仕事で通う人、買い物・レジャー・観光の人たちの大切な足になっていたときもあるそうです。現在は、近所の住民や近くの豊橋創造大学の学生がよく利用しているそうです。

船頭が、対岸と結んだワイヤーロープに船を滑らせ、竹竿1本で操る手漕ぎ船です。船は、常時牛川側に留めてあり、大村側からの乗船車は、吊るされた金パイプの鐘を打って迎いの渡船を待ちます。

かつては、豊川に10数か所の船着河岸があったが、今は牛川だけになっています。



(活用方法)

- ・ 3年 校区探検
- ・ 4年 校区の歴史
- ・ 6年 江戸時代の歴史

②豊川と霞堤と暮川地区

江戸時代を通して、牛川は吉田藩領下にありました。吉田藩主にとって、豊川の洪水から城下を守ることは常に大きな課題でありました。そこで考えだされたのが、霞堤（かすみでい）でした。あらかじめ堤防の数か所に切れ目を作って開けておき、出水が多くなるとそこから自動的に水が外へ流れ出る仕組みでした。田畑に流れ込んだ水は、しばらくして干潮と

ともに引いていき、城下町を水害から守ったのでした。霞堤の完成により吉田城下は水害から守られました。

しかし、遊水池となった沖野や暮川の田畑は、その度に水につかりました。特に暮川に住む人々にとっては、道路も水につかって交通手段も奪われることになり、日常生活に大きな影響を与えました。

豊川流域で大雨が降ると、濁流が、霞堤の切れ目から差し水となり、滞水しました。特に満潮時に重なると、その量は大幅に増えたそうです。浸水の心配があるときは、早退して来る子どもたちを忠魂碑前まで迎えに行ったようです。昼をあげ、米麦を「水上台」に上げたり、家畜を屋敷内の高い所に移したり、農機具が流れない様にしました。

日ごろから盛り土の上に家を建築し、粃米の備蓄・農作業の手順・船の管理や避難の備えなど様々な工夫をして、災害に備えていました。

暮川地区には高く積み上げられた石垣の上に建てられた家があります。

このあたりの人々は、石垣を築いて高くした土台の上に家を建てたり、大切なものが流れていかないように、屋敷の周りに木を植えたりして、家を守る工夫をしてきました。昭和58年に作られた郷土資料集「うしかわ」に、暮川にすむおじいさんの話が出ています。



石がきの上にたてられた家（暮川）

暮川に住むおじいさんののはなし

昭和のはじめごろ、この村は、わずか26軒だった。毎年、二度も三度も大水が出てとても困った。そのころ、このあたりはどの家も蚕をたくさんかっていたので、大水が出ると蚕に食べさせる大事な桑の葉も水につかり、どろ葉になってしまうのでたくさんの蚕を死なせてしまうことがよくあった。死にたえた蚕を船につんで川に捨てるのは身を切られるようにつらかった。でも、村の人たちは、それにも耐えて、いろいろと工夫して我慢強くがんばってきた。

この頃では、放水路もダムもできたので、大水に悩まされる心配はなくなった。今はいちごやぶどうを作っても水をかぶることもなく、安心して仕事にうちこめるようになった。

（活用方法）

- ・4年 「地域の歴史」
- ・6年 「明治・大正・昭和時代～川に接したくらしの歴史」

参考資料「豊橋市制施行100周年記念 校区のあゆみ 牛川」
郷土資料集「うしかわ」